

有島武郎『宣言一つ』への道・ノート（ロシア革命との関連を軸に）

——一九一七年から一九一九年前半までを中心として——

栗田 廣美

有島武郎の『宣言一つ』は、一九二二（大正十）年十一月に執筆され、翌一九二二（大正十一）年一月号の雑誌「改造」に発表された。この一文は短いものながら、「革命と芸術」「知識人と階級闘争」といった問題に鋭く触れていたがゆえに、当時の論壇に大きな論争（「宣言一つ」論争）を呼び起こした。山田昭夫氏によれば、論争関係文は四十二篇にのぼるといふ。⁽²⁾——この『宣言一つ』研究の視点を定めるために、筆者は今後、ロシア革命開始以後『宣言一つ』へと向かう時期の、有島の思想上の問題（特に「革命論・芸術論」を中心に検討したいと考えている。本稿は、こうした見通しの中で、今後追究されるべき有島の思想展開の概要と問題点を、いわば「仮説的・鳥瞰図的」に提案するための、とりあえずの簡条書的ノート（一九一九年前半までを中心とする）である。

一 『宣言一つ』とポリシェヴィズム⁽³⁾——問題意識ノート

1 『宣言一つ』は、有島武郎が、ロシア・ポリシェヴィキ革命を見つめつつ、しかもそれを超える方向性を模索しながら、自らの「革命論・芸術論」を提示しようとしたものである——とも、言うことが出来るよう。

島は、この革命こそ、「第二十世紀の歴史を最も荘嚴に彩る思潮」を生み出すべき「面も向けかねる熾烈な熔炉」だと呼び、「露西亜の人間全体の心から自覚的に又た無自覚的に進り出た」「愛の裸形の閃き」に「驚異と讃嘆」を表明した（『岩野泡鳴氏に』⁽⁴⁾）。しかし、四年後に書かれた『宣言一つ』には、既に、こうした昂揚と賛美ではない、色調を読み取ることができ、我々はそこに、いわば「ポリシェヴィズムを超える方向性」の模索に向かわざるを得なかった、有島の姿を見ることが出来るのである。

2 「なにをなすべきか」という問いを、『宣言一つ』は今も、我々に発している。

ボリシェヴィキ革命によって誕生した、ロシア型「社会主義」体制は、今、世界的に崩壊しつつある。——その七十余年間の軌跡は、我々に、「ボリシェヴィズム」そのものの、問題性を、今までより更に明瞭に、いわば「歴史的答え合わせ」として示すだろう。

そうして見ると、有島の『宣言一つ』(というよりも、『宣言一つ』を中心とする彼の一連の「文明史論・革命論・芸術論」)は、同時代、ボリシェヴィキ革命進展のさなかに、極めてナイーブな形で直観された、「革命に対する革命的批判」であった——という側面・可能性が、一段と鮮明に見えてくるのではないか。

3 むろん、これは「側面・可能性」の問題である。「革命批判」とか「ボリシェヴィズムを超える」といっても、例えば大杉栄と単純に同一化できないことは言うまでもない。

「僕は今、日本のボリシェヴィキの連中を、たとえば山川にしろ、堺にしろ(中略)皆ゴマのハイのような奴等だと心得ている」と正面から言っただけからでない大杉栄の言葉使いは、アナキスト革命家としての、自負に裏打ちされたものであり、従って彼の言は、少なくともその主観においては、ストレートに「ボリシェヴィズムを超える」。「革命的革命批判」となるのだ。

一方有島は、自らを評して「私は第四階級に対しては無縁の衆生

の一人である。私は新興階級者になることが絶対に出来ないから、ならして貰はうとも思はない」(6) (傍点栗田・以下同様) という言ひ方をせざるを得ない。文面に現れた「主観的自己規定に即するなら、有島は、「ボリシェヴィズムを超える」。「革命的革命批判」の主体どころの話ではないのである。

ロシア革命の評価も、大杉の場合、少なくとも一九二一年末からは「ボリシェヴィキ革命などという革命のにせ物」と断言し、「新資本主義」(8)の「労農政府」つまりボリシェヴィキ政権を、「革命の進行を妨げるもつとも有力な反革命的要素」(9)と呼んで、態度は実に「明快」である。

が、有島は違う。複雑な問題を孕みながらも、彼は基本的には、革命ロシアを擁護し続けたと言えるだろう。革命の進展に伴って、ますます深くボリシェヴィズムの問題性を直観しつつも、大杉栄のように明瞭な「全否定」(補)は注意深く避けた、(10) 否むしろ、革命政権の全体的評価にかかわる直接の言及そのものを、なるべく避けた形跡がある。——「ボリシェヴィズムを超える」。「革命の革命的批判」と言っても、有島の場合、それはあくまでも「側面・可能性」の問題として含み、有されて、いるにすぎない。

(補) 大杉栄にもロシア革命評価の変化はある。林尚男氏は一九二一年十二月・第三次『労働運動』発刊の時期に、「ロシア革命の擁護者大杉」から「革命の批判者」大杉への転換期を認め、その背後に、日本におけるアナキスト共同戦線の破綻と「ロシア革命そのものの内部におけるボリシェヴィキとアナキストとの対立関係の深化の反映」(11)を見て

また、むろん大杉も、ボリシェヴィキ政権は全否定しているもの、これと「ロシア革命」自体とは区別している。

4 有島は、ロシア革命の進展に伴って「揺れて」いる。革命の評価に関して揺れ、自らの位置について揺れ、そして「文明史論・革命論・芸術論」について揺れている。そこには大杉栄のような一貫した明快さがないと同時に、例えば、片上伸のような「理論的緻密さ」もない。あるのは、揺れ動きの中からも、とりあえず何か言わざるを得ない「直観的眞実性」だけだ、とさえ言えるかもしれない。

5 有島は『宣言一つ』を発表する時、むろんその後の大論争など予測していなかったろう。が、「革命と芸術」にかかわる問題意識の鮮明さゆえに、このナイーブでスキだらけの短文は多くの批判にさらされた。しかし有島は反論し、結局自説を譲らない。そして、まさにその事によって彼は、(少なくとも結果的には)当時の「革命理論の常識」とボリシェヴィズムの権威に挑んだ、と言えよう。

6 『宣言一つ』は「直観の書」である。——我々がそこに見てとるべきは、決して「理論的整合性」や「説得力」の如きものではなく、「直観的眞実性」なのだ。⁽¹³⁾

一般に、直観的眞実性は「分からぬものには、所詮分からぬ」性質を持つ。だから当時、堺利彦が、有島の議論を「誰にも賛成され

ないといふ特色をもつてゐる」とからかったのは「正しい」指摘であり、有島が「それが色々な意味で私をほゝゑませました」と苦笑するの⁽¹⁴⁾も、当然なのだ。——『宣言一つ』も、例えばアフォリズムの中に輻晦すれば「安全」だったろうし、ソフィステイケートされた人間なら決して『宣言一つ』などとは名付けなかったろう。それを敢えて名付けざるを得なかった所に、有島の思いもあるのである。

7 ロシア型「社会主義」体制崩壊後の今、有島の「スキだらけの挑戦」に問題があったのではなく、逆に、彼が挑んだ「革命理論の常識」の方にこそ問題があったと考えるのは、自然な事だろう。我々は、有島の『宣言一つ』（及び、一連の「文明史論・革命論・芸術論」）から、彼の直観的眞実性がかまえた、「ボリシェヴィズムを超える」「革命に対する革命的批判」——その「側面」を汲み上げ、「可能性」をつかみ出さねばなるまい。

二 ロシア革命と有島「革命論・芸術論」の進展・ノート

——「ボリシェヴィズム的なるもの」⁽¹⁵⁾との対決を軸とした仮説提示（一九一九年前半までを中心として）——

【鳥瞰】

8 一九一七年末（『岩野泡鳴氏に』⁽¹⁾参照）から一九二二年末（『宣

言一つ』執筆)に至る時期は、むろんロシア革命にとっても極めて重大な時期であった。

革命後の内戦——ドイツ・ハンガリーを中心とする所謂「世界革命」の昂揚と後退——二一年春のクロンシュタット反乱・ロシア共産党第十回大会での党内闘争・ネップの時代へと、この数年のうねりの中に、ロシア型「社会主義」のもつ問題性の淵源を見る事は(既に、その崩壊を目撃している今)容易であろう。

この「うねり」と、アナールボル協調から対立へという日本の状況が重なる中に、言うまでもなく、有島はいた。——ならばその「うねり」と、有島の、『迷路』『暁闇』から『或る女』『惜みなく愛は奪ふ』を経て『宣言一つ』に至る思想的歩みは、どのような関係にあったのか。

9 一九六九年、森山重雄氏の『有島武郎における生の二律性認識』⁽¹⁸⁾が発表された。氏は、有島におけるアナーキズムの要素を最大限に引き出しつつ、「革命を生命的に把握した文学者」たる有島の「マルクス主義把握」「ロシア革命観」を析出し、それまでの『宣言一つ』研究史を、次のように批判した。——「従来はこの点を見おとしていた。凡百の『宣言一つ』論は、有島のロシア革命観・マルクス観にまで及ばなかった」と。

しかし以後二十余年、『宣言一つ』研究は、森山氏の問いかけに對して正面から直截に答えることはなかったように思われる。否、

七十年代のある時期から、『或る女』等)作品研究隆盛の陰で、『宣言一つ』研究そのものが下火になってしまったのではないか。⁽¹⁹⁾——むろん有島の「思想的」歩みも様々な角度から検討できるし、それが「文学」研究であるかぎり、主たる対象が「作品」になることも一応当然だろう。しかし、有島が格闘したボリシエヴ、イズムの問題性がかつてなく鮮明に見え始めている今、森山氏の提起は、新たな作家論的研究の可能性を示唆しているように思えるのである。

——筆者は今後、一九一七(大正六)年以后『宣言一つ』に至る有島の思想的変遷を、特に、有島が「ボリシエヴ、イズム的なもの」とどう対決—撰取—批判—したかという点に(可能な限り「正面から」)視座を据えて、鳥瞰したいと思う。むろん本稿では紙幅の関係もあり、一九一九(大正八)年前半までを中心にせざるを得ないが、あくまでも「全体的鳥瞰・見通し」を堅持したい。

なお、①ロシア革命等の情勢を、有島が、いつ、いかなるルートで把握していたかの確認は本来必須だが、今回は未了・未整理である事をお許し願いたい(が、当時の『改造』『我等』、河上肇の『社会問題研究』等の記事・論調や、有島の書簡等からみて、それなりに充実した情報があった事は推測できる)。今後各々の時期をより実証的に検討する際に行いたい。②有島の個々の作品・著述に関する検討には深入りせず、全体としての見通しを重視したい。③『宣言一つ』そのもの、及び「宣言一つ論争」に関しては、基本的に別稿に譲る事にする。

10 【鳥瞰図】 「全体的把握」のためには、まず「分節化」が必要だ。——有島の「文明史論・革命論・芸術論」は、ロシア二月革命

以後、以下の七段階を経て『宣言一つ』に到達している、と考えられるのではなからうか。

- ① 革命への「未分化の共感」：一九一七年春・二月革命
- ② 「共感」の思想的内在化：同年末・ボリシェヴィキ革命開始
- ③ 「一元論的革命観」の尖鋭化と一つの「兆し」：翌年夏～秋
- ④ 「昂揚」とボリシェヴィズム的発想の流入：一九一九年前半
- ⑤ 矛盾の自覚と知識人論の登場：『或る女』後・一九一九年後半
- ⑥ ボリシェヴィズム的発想への抵抗：一九二〇年・「落潮」期まで
- ⑦ 「叛逆者のローファー」像の確立：二〇年末～二一年前半
- ◎ こうして一九二二年末の『宣言一つ』執筆段階につながる。

このようにして見ると、

- 【A】 有島は「革命」を次第に思想的に深く受けとめながら（①～③）、同時に「ボリシェヴィズム的なるもの」の「流入」を許してきた（③にその兆しが見え、④で本格化）。
- 【B】 しかしやがて、「ボリシェヴィズム的なるもの」との矛盾を自覚し、抵抗・反撃に移る（⑤～⑦）。
- 【C】 こうした「ボリシェヴィズム的なるもの」との緊張の頂点——同時にその「解決」の出発点——に、『宣言一つ』がある。

という見通しが立つのではないか。

——以下、各々の時期に関して若干のコメントを試みたいのだが、本稿では、前述の如く【A】（①～④）の段階的を絞り、それ以後はごく粗い「素描」にとどめる事にする。

またこの過程は、本来多面的に考察すべきものだが、ここでは問題を「評論」等に、しかも視点を「ロシア革命」と有島「革命・芸術論」への直接の關係に絞りこんで考察したい。従って、例えばホイットマン、バルクソン等の問題も捨象する。（なお、各期冒頭の細字注記は、本稿の必要とする限りのもののみ）。

【①革命への「未分化の共感」……ロシア二月革命】

〔一九一七（大正六）年春〕

（ロシア）一九一七・三・一二、二月革命開始

○ 日記同年三・一七、三・二二、三・二三、「三月の思い出」欄等 ○ 『血に塗れた学生服』（『東京朝日新聞』同三・二五、未校閲談話筆記） ○ 『流血に塗れたるユニフォーム』（『大学評論』同四・一未校閲談話筆記）

11 ロシア二月革命に対して、有島はまず共感を表明（『東京朝日新聞』等）するが、そこには未だ、「革命と自己」「民衆と知識人」をめぐる鋭い問題意識は芽生えていない。インテリゲンチアの革命性が「民衆を目覚めさせる」という図式は、素朴に信じられている。「今露西亜は、幾多の志士と幾千の大学生が流した血に贖はれた共和政体を樹立した。今や彼ら大学生は「最も立派な記念碑」の主として人々の賛仰を受くるものとなつた」という文章は、未校閲の談話筆記ではあるが、ある程度、この段階での有島の認識を示している。また当然の事とも言えるが、マルクス主義・ボリシェヴィズ

ムへの特別な注目もない。「マルクス」の名はダーウィン等とともに、一般的に使われているにすぎない。有島にとって、「第四階級」「階級闘争」等の語は、未だ自らの問題になってはいない。

12 だが有島の、この機敏な反応と共感の表明は、それ自体重要である。まず注目すべきは、『血に塗れた学生服』『流血に塗れたるユニフォーム』と、その十二年前(一九〇五年)、ロシア第一次革命のさなかにアメリカで執筆・「平民新聞」に送付された『露国革命党の老女』⁽²¹⁾との明らかな類似であり、有島の「ロシア」と「ロシアの革命運動」に対する、持続的な関心である。

この事は、『迷路』の問題に結合する。当時断続的に執筆されていた『迷路』連作⁽²²⁾は、有島が自らの「アメリカでの青春」を、より深化・拡大した形でとらえ返そうとするものだが、一九一七年に一九〇五年前後の自らを、より「実践的・革命的」な主人公をもつ作品世界の中で見つめている、という点に注目したい(別稿で詳述する)。

とまれ、この時期の有島の姿勢は「革命への、素朴・未分化ながらラディカルな期待」として要約することが出来よう。これは、一九〇五年前後の若き有島にも、当時執筆中の『迷路』連作にも結合しつつ、次の時期へと連続して行く。なお、以後十一月のポリシェヴィキ革命まで、有島は直接の反応をあまり残していない(有島行郎宛書簡・同年五・五、同九・一三参照)。

【②「共感」の思想的内在化……ポリシェヴィキ革命開始】

〔一九一七(大正六)年末～一九一八年初〕

(ロシア) 一・七、ポリシェヴィキ革命開始

○ 日記「十一月の思い出」欄、一二・一、七、一七、「一九一七年の思い出」欄

○ 『岩野泡鳴氏に』(『国民新聞』一九一七・一二・二六)

○ 『芸術家を造るものは所謂実生活に非ず』(『新潮』一九一八・

二) ○ 『純一な心もちから』(『文章倶楽部』一九一八・三)

13 十一月、ロシア革命はポリシェヴィキ革命に転化する。翌月に書かれた『岩野泡鳴氏に』における、有島の、革命への熱烈な「驚異と賛嘆」の表明(一三参照)は、既に「思想的根拠」を伴っている。

有島は、抑圧的な伝統制度を打破して「新しい伝統を創り出す」人間内部の「根柢的な力」を「愛」と名づけ、「この愛が芸術を生む」と言うが、ロシア革命もまた、これと同じ「力」の発露——即ち「露西亞の人間全体の心から」「迸り出た」「愛の裸形の閃き」だと直観して共感するのだ。従って、この「根柢的な力」が生み出した、ポリシェヴィキ革命は、人類の「面も向けかねる熾烈な熔炉」であり、その中からこそ「第二十世紀の歴史を最も荘厳に彩る思潮」が生み出されるのである。

——この論理によれば、「革命と芸術」は人間生活を飛躍させる単一の「根柢的な力・愛」の二つの現れであり(つまり本質的には、例えば「階級闘争」の帰結ではない)、そこに「芸術家対生活者」というような矛盾は、原理的に想定されない。即ち、「一元論的・革命・芸術論」である。芸術家としての一応の自己限定は「純一な心もちか

ら』でなされてはいるが、それも本質的な問題ではなく、「芸術家」として「実行」を当面回避するのも「妥協」しないための方策に過ぎない。逆に言えば、人間生活の飛躍（革命も含む）への芸術家の役割に対する自信があるのだ。

なお、『芸術家を造るものは所謂実生活に非ず』の論理もこれと概ね同様だが、ここで注目すべきは「愛が、実生活を変化させるもの」であってその逆ではない、という鮮明な発想である。これは後の④「ポリシェヴィズム的なるもの」の流入の時期とは極めて対照的であり（27）参照）、素朴な「上部・下部構造論」の図式とは、真っ向から対立する発想である。

14 この『岩野泡鳴氏に』執筆は、『迷路』本編後半にあたる『曉闇』脱稿の四日後だった。有島のポリシェヴィキ革命への共感と『曉闇』執筆とは、つまり同時だったと言える。この事は『迷路』論にとっても重要だろう。足助素一宛書簡で有島は、『曉闇』において「始めて、主人公が主動的に現はれ出した」と述べ、足助の評に「有頂天」になったと書いているが（一九一八・一・七）、確かに『曉闇』でこそ主人公は「主動的に」裸形になり、「世界に対峙」するに至っている。また有島自身も、「死ぬまでは掘つて／＼掘つて行くのだ」と昂揚した筆致で書きつつ（一・一四）、「芸術によつて精神を、革命によつて物質を変化させる外に道はない（中略）。生命を旧来の約束から解放して新しい方向に発足させたい」（一・一五）と

述べる。——これらは、ロシア革命に触れつつ『曉闇』を書いていた、有島の精神状態を示しているだろう。

ロシア革命への熱烈な共感、「愛」を軸とした「一元論的革命・芸術論」、『曉闇』執筆と昂揚した足助宛書簡の「決意」——これらの関連の中に、この段階の有島がある（『迷路』については別稿）。

15 が、この段階でも、有島は未だポリシェヴィズムと本格的に「出会って」はいない。ロシア革命への共感は「一元論的革命・芸術論」の中で思想化・内在化したのが、しかしその「思想」は、未だ外部の論理によって脅かされず、従って、後のように鍛えられていない。

【③「一元論的革命論」の尖鋭化と、一つの「兆し」

……米騒動・「新しき村」の時期、第一次大戦の終局的状況】

（一九一八（大正七）年夏／＼秋を中心に）

（ロシア）大規模な内戦と「戦時共産主義」の開始。

（八月）シベリア出兵宣言・米騒動、（九月）武者小路ら「新しき村」着手。

○『武者小路兄へ』（『中央公論』七・一） ○『大なる健全性へ』（『文章世界』八・一） ○『自己と世界』（『新小説』同）
○『芸術製作の解放』（『新公論』同） ○『若き友に』（『秀才文壇』同） ○『予に対する公開状の答』（『新潮』一〇・一）

16 シベリア出兵宣言と米騒動の記事が日記に見え、「新しき村」をめぐる議論がなされ、河上肇への注目も確認できる時期だが、ここでまず特徴的な事は、前段階②以来の「一元論的革命・芸術論」

が「尖鋭化」することである。『自己と世界』が、その発想上の中心に触れ、これに他の著作が関連しているように思われる。

17 『自己と世界』は「今度の世界戦争についての感想」を求められて執筆したのだが、有島は決して、所謂「平和主義」的文章を書こうとはしない。彼はまず「一体自己といふものを外にして、世界と云ふものが存在するだらうか」という問いから出発する。この根源的な姿勢は、「戦争・国家・革命」という問題に対する日常的（政治主義的）対応を突き崩す拠点となる。「自己のない所」にそもそも「世界はない」。物理的に存在しても、それは「仮象的存在」にすぎず、「自己」にかかわらぬ所で見た世界は「一つの見世物にしか過ぎない」と言う。——即ち、「世界」とは「自己」であり、「歴史」とは「自己が世界にまで拡張」したものだ、という明快なテーゼの提示であり、これは「一元論的革命・芸術論」の尖鋭化を基礎付ける論拠となる。

18 「世界・歴史」をこのように見る以上、「世界の進運」のために「自己を殺す」が如き態度は「欺瞞・墮落」以外の何物でもない。必要なことは「自己を救ひ出し、従つて世界を」救う事である。

森山重雄氏は前掲書で、この「おそろしく一貫した因果的一致論」を「武者小路の自我論を彷彿させる」「予定調和的信念」だと批判する。確かに論理自体を評価するなら、この批判は正当だろう。

しかし我々がここで注目したのは『武者小路兄へ』とも関連しつつ、世間に溢れる「有効性の（政治主義的）世界観」に、自らをラディカルに対置しようとする有島の、（後の『泉』²⁴にもつながる）力んだほどの志向性そのものであり、それが『宣言一つ』への道」の中でもつ位置である。有島は「足場」を固めているのだ。

19 「自己」を失った観察からは、革命の真の意味（人間の根柢的な力に根ざす世界の飛躍的変化、と考えられる）も見逃される。ロシアにおける「大規模な社界革命の試みがつまづき勝ちだと云へば、すぐ彼等の主張する主義の無価値を晒はうと」する者を批判しつつ、有島は、ポリシェヴィキ革命を、彼の「一元論的革命論」〔17〕の論理の中に引き込むことで、擁護している観がある。

20 『自己と世界』は「明るい宣言一つ」だとも言えよう。自己の立場を、政治主義的発想に対置しながら確定しようという志向性で『宣言一つ』と共通しつつ、同時に「偽らざる自己に帰」る事で「世界は飛躍的に変化」し「若々しく生れ出る」という確信、自己に徹する事がそのまま革命的だという楽天性に満ちているからである。

なおこの事は、『大なる健全性へ』（別稿で詳述）での「芸術家Ⅱ 民衆一体論」——即ち、「よき芸術家」は「萬人の心の正当な理解者」であり、「天才」や「芸術家」は「最も徹底した民衆の心の持

主」「体现者」だという考え方に連続する。「自己と世界」が一元的であるように、「民衆と芸術家」の矛盾も原理的に存在しない。

21 この前月に発表された『武者小路兄へ』には二つの側面がある。

第一は、武者小路の「新しき村」が「何処までも趣意に徹底して失敗せん事を祈り、自らも（農場解放だろうが）「機会の到来と共に」「存分に失敗しよう」と決意を語る点、即ち「現実的有効性」よりも思想的根源性を優先する発想である。これは『自己と世界』における思想上のラディカリズムにつながっている。

しかし同時に、ここには何やら「異質なもの」が紛れこんでいる。つまり、武者小路や自分の「失敗」は、「歴史的必然」とでも言うべきものの下に、予言されているのだ。ここでの有島の論理には、「奴隷制—封建制—資本制」という図式が、どこかアプリアリに存在している。また曖昧な形ではあれ、来るべき革命が「金の洪水」からの解放（「反資本主義プロレタリア革命」の発想を暗示している）であり、これを直視しない者に対して「人類の意志はかゝる人類進化の邪魔物を踏みつぶさないでは置かぬ」という発想がある。

——これは「歴史的発展法則」の物神化に、紙一重の表現だ。「歴史とは自己の世界への拡張だ」という『自己と世界』、あるいは有島が長期に育んで来た「中世への共感」⁽²⁵⁾とは、微妙に、しかも決定的にズレるものに注意したい。

——つまり、ここには「ボリシェヴィズム的発想が流入する兆し」が見えるのだ。むしろ「流入」そのものが「悪い」などと言うのではない。問題は有島が、いかなる対決・格闘を経て（あるいは経ずに）受け容れているかである。

しかしこの「流入」は、まだ「兆し」にすぎない。「芸術家は謳歌者であるよりも改革者」という『武者小路兄へ』の言葉も、未だ『予に対する公開状の答』の「芸術家として自己中心主義者なる私は社会改良家としても自己中心主義者です」という発想の枠内にある。また『芸術製作の解放』の「若し民衆が低級なら（……）自滅に陥らせる為めに」という言葉は（誤解をまねきやすいが、結論のみを述べれば）、未だ有島の前段階⁽²⁾以来の発想が、主導権を握っていることを示している。

22 ボリシェヴィキ革命開始後半年、有島は来るべき「革命」のイメージを、「反資本主義革命」として、鮮明化しつつ（『武者小路兄へ』、同時に、自己の足場たる「一元論的革命論」をも尖鋭化させた。

——しかしそこには「ボリシェヴィズム的なるもの」流入の兆しも伺える。

逆に考えれば、『自己と世界』での「おそろしく一貫した因果的一致論」（前掲・森山氏）は、この「兆し」に対する、有島の無意識的な防衛・「足場固め」のための「力み」だったのかもしれない。

【④「昂揚」と、「ポリシェヴィズム的なるもの」の流入】

〔一九一九（大正八）年前半……『或る女』執筆期を中心に〕

○前年一月、第一次大戦休戦条約

○ドイツ・ハンガリーを中心とした「革命的情勢」の展開 ○有

島行郎宛書簡・一・六、ティルダ宛書簡・一・一五、三・一五

○『吾が内生活の動揺』（『東京日日新聞』一・三、談話筆記）

○『雑信一束』（『我等』二月以後） ○『リビングストーン伝・第

四版序言』（警醒社書店・六月↑『東方時論』二〇四月）

23 この時期の有島（の日記・書簡等に現れた精神状態）には、ある種の昂揚が見える。むろん『或る女』改作へと向かう創作力の充実が最大の問題だが、同時に『リビングストーン伝・第四版序言』に於ける長大な「精神的自伝」の試み（自己の総括的なとらえなおし）も、同じ昂揚の、「思想」面への直接の現れとして重視すべきだろう。

もう一つの背景として、我々は特にヨーロッパ情勢の展開（「世界革命」の昂揚・註16参照）をも視野に入れねばなるまい。未曾有の大戦争の終結とともに、当時は「新たな世界」の誕生を予感しうる時代だったとも言える。——有島は個々の事件に関する記述は残しておらず、『9』末尾に記した如く彼の「情報量」も未確認だが、しかし、『24』に見るように、この、時代に底流する、「変動のうねり」そのものは敏感に受けとめている。この事を、前述の創作力や思想（「革命・芸術論」）の昂揚の背後に見る必要があるろう。

24 例えばティルダ宛書簡（英文・一・一五）には、大戦の終了に触れて「今後（……）世界文明の様相は全く新しい方向へ変わって行く

でしよう」と述べつつ、「国家」の後退・「個人」確立の時代への期待を表明し、また別便（三・一五）では「日本は今危機の時代で、ほとんど社会革命の時に」あり「民衆は社会生活を改造する何らかの試みがなされなければ満足しない」とも書き送っている。弟の行郎（在米）宛書簡にも「日本に於ても今年は思想上に動揺あるべきと共に実際にも何等か激しき運動起りはせずと予想され候。維新以来のほんとの維新は是れからなるべしと存ぜられ候」（一・六）と述べている。——当時の有島に、こうした時代認識がある事を確認したい（東大新人会での講演や、「幸徳の話」を聞くために『或る女』執筆中の鎌倉から上京したことも関連しよう）。

25 『リビングストーン伝・第四版序言』（以下『序言』）の中で、有島は、彼のアメリカ時代（一九〇三〜六年）を自己思想史上の画期と位置付け、当時彼が影響を受けたハーバードの学友・金子喜一を「純粋な唯物論的社會主義者」として描き出した。——この金子喜一が、「事実」としては「急進的自由思想家」ないし「ヒューマニスト」であって、決して「唯物論的社會主義者」などではなかった事は、瀬沼茂樹氏⁽²⁹⁾以来の定説である。しかし、それを敢えて「純粋な唯物論的社會主義者」として描き出す、この時点の有島に注目したいのである。

更に有島は、この金子像に結晶した「唯物主義と云ふ」ものが「世間が想像するやうに浅薄な所から出発してあるものでは」な

く、「少数者の手から幸福を多数者に分つ」ために主張されたものであり、「唯物論的哲学」は「切迫した人類の意志」の現れだと（条件付きながら）認めて——それを前提に、自らの思想的転換を語るるのである。

こうした記述はむろん（西垣勤氏の所論⁽³⁰⁾にもかかわらず）、「過去の事実」の、自伝執筆時における「読み直し」であろう。つまりこの「青春の総括」は、逆に言えば一九一九年現在の有島の、「ボリシエヴィズム的なるもの」への接近（あるいは「流入」）の準備とも、結果とも言えるのである。

26 「流入」を示すものは、「唯物論哲学」の肯定的評価だけではない。例えば、「現在のやうな貧富の懸隔、従つて幸福の偏頗」と言うような、さりげない表現の一端にもそれは現れている。「貧富」の問題と「幸福」とが、このようにアプリアリに結合する事は、例えば『自己と世界』の文体的世界では、考えられない事であろう。

——他にも同様に微妙な問題がある。（経済組織を）「維持すべく立てられた道徳は経済組織の変革と共に」覆すべきだという言葉、また「労働者と資産家との利害はその終極に於て一致してはゐない」、あるいは「利害の相反した二階級の儼存」といった言葉も、むろん在米当時に触れた「社会主義」を紹介する文脈の中にありながら、しかし、有島にとって「現在」的な問題を感じさせるのである。

——つまり、有島は「ボリシエヴィズム的」なターム、「発想法」を

（間接的に）受け容れ、一種の「間接話法」ながら、その言葉で語り始めているのだ。ここで「流入」し始めたタームは、やがて『宣言一つ』に向けて「成長」して行く事になる。

27 『吾が内生活の動搖』は、⁽²⁶⁾の引用が暗示する「経済」重視の発想法をかなり鮮明に示すものだ。——「思潮」の「根柢」には、「生活と云ふ大きなファクターが存在して」おり、「結局思潮は」「枝なり葉なり」であつて、根幹は「生活殊に経済的の意味に於ける生活だと思ふ」という言葉は、『自己と世界』⁽¹⁷⁾等を読んだ者には、眼を疑わせるものである。特に、「愛が実生活を変化させる」のであつてその逆ではないと主張した、かつての『芸術家を造るもの』は所謂実生活に非ず⁽¹⁸⁾と、これは実に正反対の主張になっているのだ。

むろんこの文は、いかにも未校閲と思われる小さな談話筆記にすぎない。これだけが孤立しているなら、そもそも問題にする必要自体あるまい。しかし、前掲『序言』における「ターム」「発想法」の流入と結合して考える時、これは、有島における「ボリシエヴィズム的なるもの」の本格的流入の指標のように思える。——なお、この文章に登場する「パッテン博士」は、後年、例えば『新旧芸術の交渉』（一九二二・一〇、校閲済み講演筆記）にも「屢々私の引例するところ」として（図表付きで）紹介されている「フェヒラデルフヒヤ市の経済学者」「唯物主義者」である。この「パッテン理論」もそ

れ自体は大した問題ではないが、しかし『序言』等との関連の中で見れば、言わば「ボリシェヴィズム的な」「上部・下部構造論」図式の、有島への「流入」の指標として、あながち軽視はできぬのである。

28 こうした有島の「変化」の背後に、「28」で述べた「昂揚」と、それに支えられた「24」の「時代認識」があった事を重視したい。有島は、時代の大きなうねりを直観しつつ、そうであるが故にこそ思想的対応を急ぎ、そして言わば無意識に「ボリシェヴィズム的なもの」の流入を許容したのではないか。

繰り返すが、むしろ「流入」自体が「悪い」と言いたいのではない。問題はそれが、「対決」を経た上での思想的深化なのか否かである。——次の時期⑤以後、有島はこの「対決」を余儀なくされ始め、大きな展開を迎えることになるだろう。「ボリシェヴィズムを超える」有島の「可能性・側面」は、如上の歩みの上に、次第に明瞭に孕まれて行くことになる。

三 「ボリシェヴィズム的なもの」への抵抗と反撃

⑤⑥⑦段階の素描——本稿での「結び」にかえて

29 一九一七（大正六）年のロシア革命（特にボリシェヴィキ革命）開

始以後、有島はこれを思想的に内在化しつつ、自らの「革命・芸術論」を深化したが、同時に一面においては、「ボリシェヴィズム的なもの」の流入をいわば「許容して」きた。が、この過程は未だ「序曲」にすぎない。「流入」の他方で先鋭化してきた有島の「一元論的革命・芸術論」は、「ボリシェヴィズム的なもの」との緊張の中で鍛えられ、より深化した形で復活することになる。

（本稿では以上のように、この「序曲」を「流れ」として鳥瞰したが、以後の各時期についても、極く粗い素描だけは提示して、別稿での検討の前提にしたい。）

30 【⑤段階：一九一九年後半】に、有島は『或る女』脱稿後の疲労感・「神経衰弱」を訴えるようになる。この頃、前段階④）以来の「階級論」的図式が有島の意識に定着し始めると共に、（その「帰結」とも言えるが）ブルジョアとプロレタリアに「二股」をかけた存在としての「知識人」論の問題が登場する（原久米太郎宛書簡等³¹）。これはすぐさま有島自身の問題にはねかえる。即ち、自分はこの「二股」状況にどう対応（あるいは清算）するかという問題意識と、孤立感・「淋しさ」の自覚である。——これは、「流れ」から言えば、それまで有島が流入を許容してきた「ボリシェヴィズム的」論理と、自己自身との、矛盾を自覚した事の現れとして位置づけられよう。

31 【⑥段階：一九二〇年前半】は、この「矛盾の自覚」をバネにしつつ、いわば「ボリシェヴィズム的なもの」への抵抗・反撃が始

まる時期ではないか。例えば『文芸と「問題」』に於ける力強い「変革期」のイメージ——「存在が「時」切り劈いて流れる有様」を「稲妻の姿」としてとらえ、革命期（文明の過渡期）を、稲妻の「強靱な曲線」として把握する——は、言わば「ボリシェヴィズム的なもの」との「出会い」によって鍛えられて行く、有島の「一元論的革命・芸術論」復活の姿であろう。（むしろ『惜みなく愛は奪ふ』が背後にあるし、マルクスやレーニン評価の問題も重要であるが、別稿で詳述したい。）

32 【⑦段階：一九二〇年末～翌年前半】 この「抵抗・反撃」は、一九二〇年九月以来の、有島の所謂「落潮」を経て複雑な問題を孕みつつ、この年末から翌年前半にかけて『ホイットマンに就いて』⁽³³⁾『泉』等の著作や、「日本社会主義同盟」不参加へと進む事になる。森山重雄氏が前掲書で重視した時期であり、有島におけるアナキズム的要素が最も前面に出た、激しい「抵抗・反撃」期だとも言える。ロシアにおける「革命の屈折」や、日本でのアナールボルの状況、有島の「生活改造」問題も見据えつつ、特に、有島における「叛逆者的ローファ画像」の確立を中心に（これも別稿で）考える必要があろう。

33 【『宣言一つ』論へ】 本稿「二」で述べた問題意識は、こうして、有島の歩みをたどることにより、より鮮明に見えて来よう。

『宣言一つ』は、有島が（その個性的な「革命論・芸術論」を育みつつ、しかも時代の急展開の中で）「ボリシェヴィズム的なもの」の流入をまずは許容し、やがて対決へと向かった、その緊張の頂点にあり、同時にその「解決」の出発点たらしめようとしたもの、と言うべきであろう。紙幅も尽きたので、以上「30」33は主要問題点の素描のみにとどめ、内容は⑥⑦段階の分析ともども）別稿に譲らざるを得ない。（一九九一年十二月初旬）

註

- 1 初出末尾に「一九二二 十一月二十六日」と執筆時が記入されている（全集解題）。
- 2 山田昭夫『有島武郎の「宣言一つ」前後』（『北海道新聞』夕刊、一九八二・二・二五、二六）。『有島武郎研究会会報』九号、一九九一・一〇に復刻）
- 3 「ボリシェヴィズム」は、「ロシアの革命的マルクス主義」であり「レーニン後はボリシェヴィズムより、レーニン主義といった言葉が一般的となった」（下斗米伸夫）とされる（『20世紀思想事典』三省堂、一九八九・四）。つまり、いわば「マルクス・レーニン主義」の「大正時代版」として用いたい。註15参照。
- 4 有島武郎『岩野泡鳴氏に』（『国民新聞』一九一七・一二。本文末に「一九一七、十二、十七夜」の記載がある）
- 5 大杉栄『なぜ進行中の革命を擁護しないのか・生生死死に答える』（『労働運動』三次七号、一九二二・九。現代思潮社版『大杉栄全集』七巻、一九六三・一二より引用）
- 6 有島武郎『宣言一つ』
- 7 大杉栄『そんな事はどうだっていい問題じゃないか』（『改造』一九二二・九。『労働運動』三次八号、一九二二・一〇に『労働ロシアの承認』と改題して再掲。前掲註5『大杉栄全集』七巻より）

- 8 註7の文章には「資本主義の各国は、さっそくこの新資本主義の労働ロシアと手を握るがいいじゃないか。」とある。
- 9 註5の文章には「労働政府すなわち労働者と農民の政府それ自身が、革命の進行を妨げるもつとも有力な反革命的要素であることすらがわかった。」とある。
- 10 伊豆利彦『知識人の問題―「宣言一つ」前後―』(『日本文学』一九七九・一)は、この事に触れて、有島が「ロシア革命に対して性急な判断を下さず、歴史的に見る考え方をしようになった」としている。この伊豆氏の論については、直接『宣言一つ』を扱う別稿で検討する予定だが、革命の全体的評価にかかわる決定的言及を避けた、有島の姿勢の指摘そのものに関して賛成である。
- 11 林尚男『「種蒔く人」をめぐる』(『日本文学』一九七九・一)
- 12 片上伸『階級芸術の問題』(『新潮』一九二二・二)は、当時としては「理論的」な著述でありながら、むしろそのために、有島の問題提起を受けとめ、こなつた典型例であろう。そこには有島「宣言一つ」と対照的な「体質」が伺える。有島はこれに対し『片信』(『我等』同・三)でコメントしているが、「氏の(……)博学を裏書きするだけのものだ」等、違和感を隠せないでいる。
- 13 『「静思」を読んで倉田氏に』(『泉』一九二二・一一―一二)で、有島自身、「自分の中から或る主張を生み出して、人に訴へようとする思想家」の主張の中には「何等かの矛盾撞着」がないにしても「表現の混雑」があり、むしろ「暗示として受け取つた時」正しく理解できると述べている。これは有島自身の『宣言一つ』にも当てはまる事だ。
- 14 有島武郎・八木沢善次宛書簡(一九二二・一・二九)
- 15 「ポリシェヴィズム的なるもの」という言葉を、筆者は、かなり広がりのあるものとして用いたい。即ち、「ポリシェヴィズム」の理論や運動、あるいはその図式化のみならず、それが含有し、または生み出す発想法やチーム、更にはそれとかわる「気分」の問題まで考えたいと思っている。註3参照。
- 16 所謂「世界革命」の昂揚——一九一九年一月のドイツ・スパルタクス団蜂起、三月のハンガリー・プロレタリア革命(七月に崩壊)、三〇五月の中部ドイツ各地における共産主義者蜂起等は、同年のコミンテルン結成とともに、この「昂揚」の中心的なものであるが、翌年八月にロシア赤軍がワルシャワで敗北する頃、この「世界革命」のヴィジョンは現実性を失って行く。なお、有島がこれらの状況を、当時どの程度認識していたかは未確認だが、例えば後になるが吹田順助宛書簡(一九二二・一・一九)やテイルダ宛書簡等には、有島のヨーロッパ情勢への強い注目の姿勢は示されている。
- 17 ロシア共産党第十回大会(一九二一・三)を頂点とする党内闘争(トロツキー派、レーニン派、労働者反対派による「労働組合論争」)に關しては、山田昭夫氏の指摘(『有島武郎の「宣言一つ」前後』・註2参照)通り、室伏高信『労働反対』(『改造』一九二二・九)を通じて、有島は強い関心を寄せている。この事に関して別稿で詳述の予定。
- 18 森山重雄『実行と芸術―大正アナーキズムと文学―』所収(『初出。塙書房、一九六九・六』)
- 19 むろんこの間にも、いくつもの貴重な達成があることは言うまでもないし、最近の有島研究者以外からの注目(例えば『批評空間』誌所載の諸論)もある。しかし七十年代初期まで、『宣言一つ』は有島研究の一つの「軸」として確固たる位置を占めていたように思えるが、その位置は失われていたのではないか。三浦雅士氏が『戦後批評ノート』(『季刊思潮』七号、一九九〇・一)で指摘する「昭和四十年代以降」「高度経済成長」期の問題と、これは関連しているように思われる。
- 20 『流血に塗れたるユニフォーム』(『大学評論』一九一七・四)
- 21 『露国革命党の老女』は、一九〇五年二月以前(弁護士ピロポデーイと共同生活をしてきたハーバード大学在学時・後半初期)に書かれ、「平民新聞」に送付された。なお全集解題によれば、同紙は終刊後であったので『毎日新聞』一面に連載された(一九〇五・四・五―一〇)。
- 22 『迷路』連作中、序編となる『首途』は前年三月発表したが、本編前半に当たる『迷路』は一九一七(大正六)年十月に脱稿、本編後半に当たる『暁闇』は、ポリシェヴィキ革命開始直後の十二月十四日脱稿である。
- 23 原久米太郎宛書簡(一九一八・九・六)で、福田徳三との論争に触れ

- つつ、河上肇に共感を示している。
- 24 『私どもの主張』（森本厚吉との合著・文化生活研究会刊、一九二一・五）所収。前年十一月に行った講演の筆記だが、「直筆に近い資料価値を有する」（全集解説）。
- 25 「中世への共感」——『叛逆者』（『白樺』一九一〇・一一）等に現れている、有島独特の歴史意識であり、クロポトキンの影響を見ることができ、その淵源は札幌農学校時代（あるいはそれ以前）にたどる事ができよう。——拙稿〇『有島武郎「叛逆者」と中世への共感』（『日本文学』一九八五・七）、〇『有島武郎「鎌倉幕府初代の農政」と中世への共感』（『淵源』『キリスト教文学』五号、一九八六・五）、〇『有島武郎・少年期の習作について』（『鹿兒島短期大学研究紀要』三六号、一九八五・一〇）等で論じて来た。また、つとに江頭太助氏『有島武郎と「フランチェスコ伝」』、『近代文学論集』三号、一九七七・一一）に「中世志向」の重要な指摘があり、高山亮二氏の『有島武郎とクロポトキン』連作（一九八〇以後『北方文芸』等諸誌・続行中）にも、これにかかわる貴重な指摘がある。さらに長谷川義氏の『都市廻廊・あるいは建築の中世主義』（一九七五↑七三、現在「中公文庫」）も、これに関連する問題を提起している。
- 26 この時期の日記（英文）・書簡等には、例えば「自然」や「女性」に関する感受性を見ても、非常に生命的な一種の「昂揚感」が感じられる。
- 27 テイルダ・ヘックは中立国スイスの女性でありながら、第一次大戦には志願看護婦としてかわわっていた。またその交友範囲もヘルマン・ヘッセ等を含んだ知的なものであり、こういう女性との長い付き合いも、有島のヨーロッパ情勢への生き生きとした反応と関係するだろう。有島の外国在住者への手紙は、この時期特に重要であり、その事自体、彼の精神のあり方にふれる問題である。——拙稿『テイルダ・ヘックの記念品から』（『日本近代文学』三六集、一九八七・五）、『有島武郎とテイルダ・ヘックをめぐる、スイスでの論評』（『鹿兒島短期大学研究紀要』三九号、一九八七・三）等参照。
- 28 鎌倉円覚寺の松嶺院に籠もって『或る女』執筆に没頭していたが、四月十四日、沖野岩三郎による「幸徳の話」を聞くために、わざわざ上京して（日記・同日）。
- 29 瀬沼茂樹『社会主義者金子喜一』（『日本文学』一九六四・一〇）
- 30 西垣勤『過去をどうみつめるか』（『黄塵』二号、一九六七・一）、『有島武郎論』・有精堂・一九七一・六所収）で、氏は、この自伝の「事実と虚構」の問題を、いわば「信仰の総括」における「マイナス」面を基軸に扱っているように思われるが、ここでは、有島なりに（少なくとも主観において）「積極的」だったとも言える側面に焦点を当てたい。
- 31 一九一九・七・五、同一・五
- 32 一九二〇・一『新潮』掲載。執筆は前年十二月。
- 33 一九二一・三『新社会への諸思想』（聚英閣刊）所載。もとなる講演（新人会学術講演会）は前年十月。
- 〇 本稿は、有島武郎研究会第十回大会（一九九一・一一・三〇）シンポジウム「有島文学における諸問題・『宣言一つ』をめぐる」での発題の一部をもとにしたものである。シンポジウムにおける討論・御質問・御教示に感謝申し上げます。また、法政大学大原社研に感謝申し上げます。
- 〇 文中の傍点はすべて栗田による。（一九九一・一二・初）
- くりた ひろみ（日本近代文学）